

# 江戸時代後期の掛香に関する一考察

福田博美\*

## A Study on the Kakegō in the latter Edo era

Hiromi Fukuda

**要 旨** 本稿は、江戸時代後期、町人社会に流行した掛香について、その形態、材質、用途の特色を、関連の浮世絵42点の分類および文献資料と照合考察することによって、世相・服装との関連性を明確にするものである。

慶長～寛永期（1596～1644）、掛香は球形の匂袋の左右に紐を付け、首から胸元に掛けて携行する形態で遊女らにみられた。小袖服飾との関係では、帯幅が広くなると、次第に懐中物が発達し、貞享期（1684～88）には懐に納める匂袋へ変わる。天明期（1781～89）に入ると、掛香は紐の両端に匂袋を付け、首に掛けて袋を両袖に落とす形態で普及し、その様子は寛政～文政期（1789～1830）の浮世絵に描写される。また、当時の衣料を代表する緋縮緬の裁端裂を材料とした掛香は、それらを使った服飾と共に発達し、絞りの生地でも作られた。さらに、抜き衣紋により胸元から背中まで広く抜かれた肌には、白（襟白粉）と赤（掛香）の対照美が表現され、町人の粋をも表わすものである。そして、男女を問わず身だしなみとして掛香は携行され、その流行から、町人の生活文化の向上をとらえることができる。

### 緒 言

匂袋は、香料の伝来を契機に形成され、正倉院宝物に遺存される。わが国に香が定着した結果、平安時代の公家装束に薫物をする習慣が生じた。一方、薬玉も端午の節句に邪気を払い、長命を願って掛けた匂袋に始まるのである。

江戸時代に入り、特に後期には、町人の間に掛香が流行した。掛香の実物資料が未見のために、本稿は、その形態、材質、用途の特色について、関連の浮世絵を分類し、文献資料と照合考察することによって、世相・服装との関連性を明確にすることを試みるものである。

### 第1章 江戸時代前期の掛香

慶長八年（1603）刊行の『日葡辞書』には、「Caqegō, カケガウ（懸香）ある人々がふとこ

ろに入れて携行する、色々な香料を入れた小さな袋<sup>1)</sup>と記され、掛香の描写は、慶長～寛永期（1596～1644）の風俗画にみることができる。

すなわち、『阿国歌舞伎草紙<sup>2)</sup>の念仏踊をする女性、『歌舞伎図巻<sup>3)</sup>で舞台中央に立つ采女、そして『桜下弾弦図<sup>4)</sup>の煙管を手にする遊女らの首に下げられた球形の匂袋である。貞享三年（1686）、黒川道佑の著書『雍州府志』巻六土産門薬品部（香具）には、

又一種有香囊或謂匂袋於其方也有花世界兵部卿等之名是亦麩末香劑各有輕重多少之差別各量之而滾合之共盛絹囊而囊左右著緒繫頂懐其袋故元稱掛香今無其儀徒納之緒懐是謂匂袋<sup>5)</sup>

とある。掛香は絹袋の左右に緒を付け、うなじにつなぎ、その袋を懐にするものであるが、それは貞享以前の形態であり、当時は匂袋といわれて懐に納めたものになっていた。その特徴を示したものに、貞享二年（1685）刊行『女用訓蒙図彙』の匂袋が挙げられる<sup>6)</sup>。そこに記された球形・方形の二形状の袋には、首に掛けるた

\* 本学講師 日本服装史

めの紐はみられない。そして、元禄三年(1690)松尾芭蕉の連歌には「掛香を小袖のふりに縫ふくみ」<sup>7)</sup>とあり、小袖の袖丈がしだいに長大化する頃、掛香は袂に縫い付けられたようである。さらに、元禄五年(1692)刊行の『女重宝記』には「かけ香は小そでのたゝみたるあはひに入おき、衣桁などにかけてるはよし。夏のあつきころ、かけ香の匂ひはなはだしきは、しよしなるものなり。」<sup>8)</sup>と記されることから、汗を多くかき体臭が気になる夏の対処法として、薰衣香に替わる簡便な掛香が好まれたのではないだろうか。つまり、江戸時代前期の掛香は、町人の小袖服飾の発達に伴い形成された。初期の小袖は、身幅が広く、打合せは深い、帯が細いため、懐に物を納めるには不安定で、首に掛ける必要があったが、その後しだいに帯幅が広くなり、懐がしっかりしてくると、懐中物へ変化したのである。

## 第2章 江戸時代後期の掛香

かけ香や唾の娘のひとゝなり

かけ香や何にとゞまるせみ衣<sup>9)</sup>

と、与謝蕪村の句にあるように、江戸時代も後期に入ると、掛香は町人に身近なものとなり日常使用された。それを描いた浮世絵が、現況では42点見出され、時代による相違をみるために年代順に配列したものが表1である。当時の文献資料として、洒落本を主材料に照合考察し、形態、材質、用途の特色を明らかにしたい。また、安永三年(1774)刊行の『婦美車紫軒』に、女郎買道具として「肌着は紅類をいむ匂ひ袋はごめん」<sup>10)</sup>と記されることから、天明期(1781~89)以前の浮世絵に掛香は見られないようである。

### 第1節 掛香の形態

江戸時代後期の掛香は、紐の両端に匂袋を付け、首に掛けて袋を両袖に落としたもので、前期の形態とは異なる。寛政三年(1791)山東京傳著『仕懸文庫』には「かけ香のひもをむねの所で十文字にとり」<sup>11)</sup>とあり、寛政年間(1789

~1801)刊行かとされる関東米著『玉之帳』にも「ゑりあしの所からゆきのよふなむねへかけてかけ香の糸ひも十もんじにかけちがひ」<sup>12)</sup>と記され、胸元で十文字に交差された着装がみられる。このことは、寛政~文政期(1789~1830)の浮世絵(表1: \*で表記)に明確であり、袋を袂に入れて安定させる工夫ともみられる。次に、匂袋自体をみるとNo.①、②は球形で、前期のものに類似するが、No.③、⑬、⑭、⑮は方形である。それ以外のものは紐の部分でしか判断できず、後者に属するものと推察されるが、紐を次の三点と解釈することも可能であろう。まず禪の紐、これはNo.⑳で給仕・料理する女性にみられ、掛香との二形態が描かれている。禪と胸紐を同時に描写した例もみられ、禪を掛けない場合に肩へ紐を輪にして掛けたことから掛香と区別されるものと考えられる。次に扱き帯とも推定されるが、それは前で結び提げ、首に掛けた記述はみられず、表1の小袖帯では、帯幅が広く、扱き帯は描写されない。そして、胸守の紐との関連では、図3で明らかのように、その形態は異なり、紐の多くは組紐で、寛政期~文政期(1789~1830)の掛香とは二分されるものである。

### 第2節 掛香の材質

掛香の材質は、天明期のNo.①~③と寛政~文政期のNo.④~⑮に大別され、前者は細い組紐に絹製(錦か)の匂袋(図1)、後者は共通して赤い布製の匂袋に共裂の紐が付けられ、中には絞りの生地でも仕立てられたようである(表1: ○で表記)。それらを明記した文献資料は未見であるが、当時の衣料との関連から、その材質は緋縮緬と推察される。それを裏付ける資料として、緋縮緬の記述を挙げると、明和五年(1768)醉郷散人著『吉原大全』に「汗染たれど緋ぢりめんの襦袢」<sup>13)</sup>と記され、すでに報告の通り当代を代表する地質の一つに縮緬があり、緋色は襦袢に多かったのである<sup>14)</sup>。また、緋縮緬は湯具、ゆもじ、ふんどし、下帯に、幅広く用いられ、それらの裁ち端の余り裂から掛香を作ったと考えられる。さらに、三宅也來著

## 江戸時代後期の掛香に関する一考察

表1 掛香を描いた浮世絵

No.	成 年	浮 世 絵
①	天明2 (1782)	北尾政演画：当世美人色競・山下花
②	天明6 (1786)	同：遊女はた巻 (『吾妻曲狂歌文庫』)
③	寛政7 (1795)	鳥文斎栄之画：若那初衣裳・兵庫や三つ浜さゝのうらの
④	寛政7・8 (1795・6)	⊗ 歌川豊国画：階段を下りる女
⑤	同	○ 百川子興画：略六玉川・千鳥玉川
⑥	寛政年間 (1789~1801)	○ 歌川豊春画：提灯もつ女
⑦	同	鳥高斎栄昌画：めんないちどり
⑧	同	* 喜多川歌麿画：更衣美人図
⑨	同	* 同：母と娘
⑩	同	⊗ 同：江戸風美人揃・髪結い
⑪	寛政末~享和年間 (1800頃)	* 同：四つ手網
⑫	享和2 (1802)	* 同：教訓親の目鑑・浮気者
⑬	享和3 (1803)	* 同：美人合花角力・茶托
⑭	享和年間 (1801~4)	* 同：三美人図
⑮	同	* 同：近代七才女詩歌・井上通
⑯	同	* 同：酩酊の七変人
⑰	同	○ 歌川豊国画：夏の富士美人合
⑱	同	○ 同：風呂場 (入浴風景)
⑲	同	○ 同：風呂場美人
⑳	同	⊗ 同：盃
㉑	同	⊗ 同：紅
㉒	同	○ 同：風流七小町略姿絵・通小町
㉓	同	⊗ 歌川豊広画：三味線を持つ美人図
㉔	同	* 同：两国橋畔の美人
㉕	同	* 喜多川月磨画：辰巳の名取
㉖	享和~文化3 (1801~6)	* 喜多川歌麿画：二葉草七小町・おさな小町
㉗	文化4 (1807)	* 勝川春亭画：江戸前大蒲焼大和田
㉘	同	* 菊川英山画：两国橋花火船
㉙	文化 (1804~18) 初期	* 同：青楼名花合せ・鶴屋内籬原
㉚	同	* 同：風流名所雪月花・雪
㉛	同	同：風流浮世姿・小野小町
㉜	文化 (1804~18) 中期	同：夕涼み沢辺蚩
㉝	同	⊗ 同：新形婦賀川染
㉞	文化年間 (1804~18)	同：仇競浮世絵姿・比翼紋二蝶蝶
㉟	同	⊗ 歌川豊国画：時世粧百姿図
㊱	同	○ 鳥居清峯画：東錦美人合・口紅さし
㊲	同	○ 同：風流五葉松
㊳	同	○ 鳥羽廣丸画：文書き美人圖
㊴	文化~文政年間 (1804~30)	○ 歌川国安画：花
㊵	同	* 同：六娥撰大伴黒主・蟬なくや

No.	成 年	浮 世 絵
①	文化～文政年間 (1804～30)	歌川国政画：隅田川三冊あたり花見船図
②	同	⊗ 北橋山人画：名妓夏姿と子供花火遊び図
＊：掛香の紐が胸元で交差されるもの ○：掛香に絞りの文様がみられるもの		

『萬金産業袋』に「縮緬…切付にして裁て賣」<sup>15)</sup>とあることから、商品化された裁ち端裂が使われたとも考えられる。寛政年間(1789～1801)刊行の山旭亭主人著『孔雀そめぎ』に「二十両たりねへで襦半一ツの記念おくりて」<sup>16)</sup>と記されることから襦袢は町人の衣料として高価であり、その裁ち端裂は貴重であったと推察される。そして、縮緬の流行は衣料ばかりでなく、髪飾りにも普及し、享和二年(1802)の町触には「近頃女子之髪之飾に縮緬之色切を裁切、又は絞杯致し候切を、髪之飾=用候様=拵賣出候」<sup>17)</sup>とある。掛香は髪飾りのように表に露われることが少ないので禁令にまで至らなかったであろうが、縮緬は材料として手に入れやすかったと思われる。一方、絞りの生地については、天明二年(1782)豊川里舟著『登美賀遠佳』に「しほりちりめんのしゆばん」<sup>18)</sup>、寛政十二年(1800)爰干おきなさい著『田多好鬘』に「下着はひがのこちりめん」<sup>19)</sup>とあり、その技法について同年刊行の『風俗通』(松風亭如琴著)では「じゆばんはちりめんのらせんしぼ

り」<sup>20)</sup>と記される。鹿子絞りの一種である羅仙絞や阿彌陀絞の記述もみられ、表1との照合では、生地部分が小さいこともあってその判明は難しいが、鹿子絞りと解るものや花形を文様としたものもみられる。そして、寛政十年(1798)酒屋橘子著『十界和尚話』に「紅しほりのさらしのじゆばん」<sup>21)</sup>と記され、同十一年(1799)若井時成著『粹学問』に「緋鹿子の手拭が五筋ほどたまつたばかり」<sup>22)</sup>とあることから、材質としては縮緬ばかりでなく木綿も使用されたと考えられる。文政十三年(1830)大蔵永常著『農稼業事』後編卷之二には、紅染の事として「晒木綿を色こく染れば緋縮緬に見まがふごとく見事なるものなり」<sup>23)</sup>と記され、掛香の材質に木綿を取り入れることでその普及は進んだのであろう。

### 第3節 掛香の用途

明和七年(1770)夢中散人寝言先生著『辰巳之園』には「匂ひ袋のやうなものはな、室町の桐山三了が所からとりねエ」<sup>24)</sup>とあり、天明八年(1788)甘露庵山跡蜂満著『替理善運』に

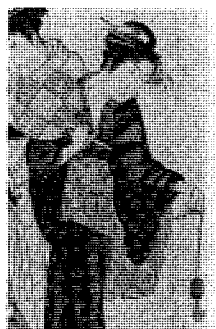


図1 天明期の掛香(表1-①)  
襟元には紐が途中まで描かれ、袖口から出された掛香は、細い組紐と球形の匂袋から成る。

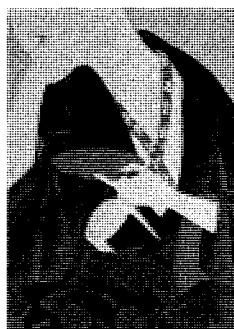


図2 享和期の掛香(表1-②)  
胸元で交差された紐には桜の文様がみられ、夏の衣であろう薄地の袖には袋が透けて見える。

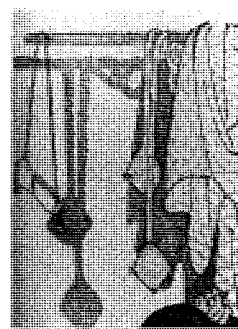


図3 掛香と胸守(表1-③)  
風呂場の竿に掛けた掛香(右)と胸守(左)。掛香の形態が明確で文様は花形である。

も「ときぐすり屋の徳さんにもらつたにほひ袋」<sup>25)</sup>と、匂袋は薬屋で扱ったようであり、中に入れた香料との関わりによるものと思われる。掛香の入手も同様であったであろう。

明和八年(1771)刊行の『ものはくさ』には「夏の衣には男さへいさゝかのかけ香ありやなしにはほえるはおくゆかしくもありなん」<sup>26)</sup>と記され、享和二年(1802)森山孝盛著『賤のをだ巻』にも男性の風俗を描写した記述に「夏匂袋をたしなむ人さへ絶てなし。…略…夏冬ともに、うすく能程に掛香を嗜みたり。」<sup>27)</sup>とあり、No.⑩は男性の着装を表わしている。すなわち、掛香は町人の女性ばかりでなく、男性にも用いられ、その目的は身だしなみにあったのである。天明六年(1786)山東京傳著『客衆肝照子』に「どふかわきが有るさふで。わるくさひにはほひふくろをかけている。」<sup>28)</sup>とあり、文化二年(1805)陳文閑人著『仇名草青楼日記』には「匂ひ袋に狐臭の悪魔を払ひ」<sup>29)</sup>と記されるように、掛香は腋臭の対処法に用いられるところから、両方の袂に入れられたことが納得できる。その詳細は、文化十年(1813)刊行の『女子愛敬都風俗化粧傳』に

○腋臭を治す伝一腋臭は…略…暑気の比おいは、その臭気はなはだしく、これを覆さんと、多くの金銭を費やし、掛香を帯ぶる…(巻式・手足之部)<sup>30)</sup>

○掛香の法一掛香は夏月、汗臭きを去り、衣類の匂いを香しく、なお風情ある嗜みのその一つ也。或は小袖簞笥に入れ置きて、小袖に香をとむる也。(巻七・身嗜之部)<sup>31)</sup>

とあり、当時の町人が自分の身だしなみに関心を持ち得たところに生活観の変化と生活文化の向上を知るものである。そして、化粧との関連では、寛政二年(1790)山東京傳著『傾城買四十八手』に「ゑりへばかり白粉をすりこみ、かほはまだをしろいなし。」<sup>32)</sup>とあり、抜き衣紋の流行は襟足の美しさを強調するために襟白粉を普及させ、胸元から背中まで広く抜かれた肌には、白(白粉)と赤(掛香)の対照美が表現された。寛政六年(1794)碓音成著『遊里不調法記』

に「かけ香は在所の粹と見ゆる也」<sup>33)</sup>と記されるように、町人の粹を表わしたようである。

しかし、掛香の流行も文政頃よりしだいに衰退し、文政四年(1821)翠原子著『楼上三之友』には「掛香を禁じて歯齧をゆるしたは。」<sup>34)</sup>と記される。その後、天保八年(1837)『春抄媚景英對暖語』に「袂おとしの匂ひ袋」<sup>35)</sup>とあり、同十二年(1841)『用捨箱』に「誰袖は匂ひ袋なり。紐をつけて二ツ連ね、今袂落しといふ物の如くして持し」<sup>36)</sup>と記されることから、袂おとしの匂袋は首に掛けず紐を背中又は懷中に渡して、袋を両袖に落したのである。すなわち、江戸時代末期に流行した袂落しは、掛香の形態を伝承したものと考えられ、袋物の多様化をとらえることができる。

## 結 言

弘化三年(1846)山本京山著『蜘蛛の糸巻』に鼻紙袋の始として「絹にもあれ木綿にもあれ四角にぬひくゝるべき紐をつけ内には途中用の物を入れしを鼻紙袋とて妻などに細工させ今の如く(天明をさしていふ)鼻紙袋屋といふものなかりし」<sup>37)</sup>と記され、掛香に直接関わる記述ではないが、四角に縫って紐を付ける形態は基本的に類似しており、細工物が商品化された過程も掛香と関連し合うようである。寛政六年(1794)、大阪の遊里風俗を描いた『虚實柳巷方言』には当時の流行として「汐せの袋物」<sup>38)</sup>を挙げ、京都・大阪から江戸へ袋物の流通が発達し、袋物商、小間物商が確立した。掛香もそうした背景から薬種商との関わりをもって普及したのである。

本論を要約すると、江戸時代後期の小袖服飾との関連では、袖丈・帯幅の長大から、掛香は、首に掛けて両袖に納められ、当時の衣料を代表する緋縮緬の裁端裂を用いたことで、その普及は促進された。そして、掛香を身だしなみとして携帯した背景から、町人の生活文化の向上をとらえることができる。

終りに御懇篤なる御指導を賜った本学名誉教

授、遠藤武先生、本学助教授、佐藤泰子先生に深く感謝の意を表します。

注

- 1) 土井忠生・森田武・長南実編訳 邦訳日葡辞書 p. 94 岩波書店 1980
- 2) 大和文華館蔵
- 3) 徳川黎明会蔵
- 4) 出光美術館蔵
- 5) 国書刊行会編纂 續々群書類従 第八地理部 p. 166 続群書類従完成会 1978
- 6) 田中ちた子・田中初夫共編 家政学文献集成〈続編〉第九冊江戸期Ⅷ所収 p. 41 渡辺書店 1970
- 7) 宮本三郎校注 校本芭蕉全集 第4巻 連句編 31 角川書店 1964
- 8) 田中ちた子・田中初夫共編 家政学文献集成 第三冊江戸期Ⅱ所収 p. 217, 8 渡辺書店 1971
- 9) 日本古典文学大系58 蕪村集一茶集 p. 105 岩波書店 1965
- 10) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第6巻 p. 149 中央公論社 1979
- 11) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第16巻 p. 24 1982
- 12) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第19巻 p. 229 1983
- 13) 蘇武緑郎編輯 花街風俗叢書 第1巻 江戸遊里風俗篇 p. 137 大鳳閣書房 1931
- 14) 服装文化協会編 服装文化 No. 163 佐藤泰子「江戸時代後期の染織」 p. 41~47 文化出版局 1979
- 15) 日本経済叢書刊行會編纂 通俗経済文庫 第十二巻 p. 148 日本経済叢書刊行會 1917
- 16) 前掲書12) p. 246
- 17) 高柳眞三・石井良助編 御觸書天保集成 下 p. 441 岩波書店 1958
- 18) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第11巻 p. 279 1981
- 19) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第18巻 p. 307 1983
- 20) 前掲書12) p. 29
- 21) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第17巻 p. 188 1982
- 22) 同書 p. 312
- 23) 後藤捷一・山川隆平共編 染料植物譜 p. 834 民芸織物図鑑刊行会はくおう社 1972
- 24) 日本古典文学大系59 黄表紙洒落本集 p. 308 岩波書店 1974
- 25) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第14巻 p. 102 1981
- 26) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 補巻 p. 40 1988
- 27) 日本随筆大成編集部編 日本随筆大成 第三期 4 p. 236 吉川弘文館 1977
- 28) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第13巻 p. 212 1981
- 29) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第23巻 p. 245 1985
- 30) 東洋文庫414 p. 114 平凡社 1982
- 31) 同書 p. 247
- 32) 前掲書24) p. 409
- 33) 前掲書11) p. 154
- 34) 洒落本大成編集委員会編 洒落本大成 第26巻 p. 340 1986
- 35) 日本名著全集刊行會編輯発行 日本名著全集 第一期出版江戸文藝之部 第十五巻 人情本集 p. 498 1928
- 36) 日本随筆大成編集部編 日本随筆大成 第一期 13 p. 172 1975
- 37) 蘇武緑郎編輯 花街風俗叢書 第2巻 江戸岡場風俗篇 p. 274
- 38) 蘇武緑郎編輯 花街風俗叢書 第3巻 浪花遊里風俗篇 p. 226